様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００５９２

研究課題名（和文）日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明

研究課題名（英文）Historical Semantic Change in Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language and Korean Sign Language

研究代表者
相良　啓子（Sagara, Keiko）

国立民族学博物館・共創促進研究国立民族学博物館拠点・特任助教

研究者番号：９０７４８７２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本手話と、日本手話と系統的に関係がある台湾手話、韓国手話の語と意味の歴史変化に焦点を当ててデータを収集し、日本手話203語、台湾手話180語、韓国手話119語、計502語をGlobal Signbank (https://signbank.cls.ru.nl/) に登録を行った。その中で、親族名称、数詞に加えて、日常的によく使用する語彙、特に、日本手話の「上手・下手」、「かまわない」、「本当」、「ルール」の語には、台湾手話および韓国手話でも使用されており、各語に言語接触による意味の変化がみられ、ぞれぞれの言語における文法化がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、国際的なglobal signbankに日本手話ファミリーの語彙を登録し、動画に加えて意味および用法の違いを比較し意味の変化を示したことに意義がある。手話言語学研究における歴史言語学的研究は新しく、特に意味の変化を示した研究は非常に少ない。本研究は、3言語を対象とし文献資料および実在する談話データから具体的な例を導き出した。本研究を通して、各言語の手話話者の研究ネットワークが生み出されたことも社会的意義がある。
　今後さらに自然発生する談話に基づいた例文を収集し、より多くの語彙の意味および用法の違いを明らかに示すための基盤ができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I collected data to examine semantic change across Japanese Sign Language (JSL), Taiwan Sign Language (TSL) and South Korean Sign Language (SKSL). As part of the analysis process, a total of 502 signs have been added to the Global Signbank database (https://signbank.cls.ru.nl/) for the three sign languages (203 entries for JSL, 180 for TSL and 119 for SKSL).
In addition to kinship terms and numerals, the data showed that some commonly used signs, especially those meaning “skilled/unskilled,” “don't mind,” “true,” and “rule” in JSL are also used in TSL and SKSL, and each of these signs showed semantic changes due to language contact and grammaticalization in the respective languages.

研究分野：手話類型論、歴史言語学

キーワード：意味の変化　言語接触　日本手話　台湾手話　韓国手話

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

手話言語の研究は、1960 年代からスタートした新しい研究分野であり、特に歴史言語学研究は、非常に少ない。そのため、手話言語の比較のための記述法や再構の仕方などの研究方法が確立していない。また、地域ごと、年代ごとの映像を再生できる日本手話コーパスはあるが、意味の比較等、言語学的な分析に必要な情報が記述されたコーパスは存在しない。

日本手話から分岐した手話には、台湾手話と韓国手話があることが報告されている（Fischer and Gong 2010,Sasaki 2007）。Sagara(2014)は、日本手話の数詞表現の地域分布と台湾手話の数詞表現の地域分布に、関連性がみられることが指摘されている。これは、台北では東京、台南では大阪の聾学校の教師により手話が普及したという背景（Smith 2005）を反映しており、台湾手話と日本手話を比較することで、分岐後の言語変化の過程をみることができることを示している。また、韓国においても、日本統治時代、1913 年に設立された「済生院」に日本人の教員が派遣され、日本手話を取り入れた教育が行われていた（朝鮮総督府済生院　1999）。こうした背景からこの３手話間には、共通した語が多く存在しているが、分岐後の形や意味の変化について学術的に検証されたものは非常に少ない。

２．研究の目的

本研究の目的は、歴史的に関連がある日本手話ファミリーの語の意味および用法の違いおよび変化を明らかにすること、また、その成果をこれまで進めてきた音韻、形態の変化に関する研究成果と合わせて、手話言語学における史的変遷を具体的および体系的に示すことである。

３．研究の方法

現在使用されている表現と似ている形をもつ古日本手話のデータ約「100 語」を抜き出し、これらの語彙について音韻および形態の情報を記述する。語彙の中で写像性が高く、歴史的な関係を見いだすことができないと思われる語を省き、写像性が高くても、数のように言語としての体系をもった語彙は含めるなど、目的に応じて語を選択する。現在使用されている日本手話については、原が作成した『日本語－日本手話事典』(1997)を基にした語彙の音韻情報のデータベースの中から関連する語を選択し、Global Signbank (https://signbank.cls.ru.nl/)に登録する。登録した語彙を基盤データとし、３手話それぞれについて、80 才以上と 30 代から 40 代の話者、それぞれ 2 組ずつの会話を通して、文脈による語彙の使い方や意味の違いに焦点をあてたデータの収集を行う。国内では、歴史的関連がある東京と大阪、台湾では台北と台南、韓国ではソウルで調査を行う。

４．研究成果

１．数詞について

台湾手話の「10」「100」「1000」に意味の縮小がみられ、日本手話の「100」に意味の拡大がみられた。まず、意味の縮小については、人差し指を曲げた状態の「10」を左右に揺らす表現の例がある。この表現は、現日本手話、現台湾手話、現韓国手話のいずれにもみられる。この表現が、現日本手話では基数と金額、現台湾手話では金額、現韓国手

話では基数と金額というように形は同じでも意味が異なっている。この意味の変化には、もともと基数と金額の意味で使われていた日本手話の親指を曲げて揺らす「10」が台湾でも使われていたが、分岐後、台湾では、この揺らす動きが「台湾ドル」という意味を担う形態素 /shake/ に発達した。その結果、台湾では左右の揺らしを伴う表現は基数の表現に「台湾ドル」という単位を表す動きが加わった表現になり、揺らしを伴わない基数とは異なる語となった。現台湾手話においては、親指と人差し指、中指の指先をつけて表す「100」、親指と人差し指、中指、薬指の指先をつけて表す「1000」でも同様に、左右の揺らしを伴う表現は、「台湾ドル」という単位を意味する語に変化し、意味が縮小した変化がみられる。

続いて、意味の拡大については、両手の「100」の例があり、非利き手でカーブをつくり、手首を撓屈し利き手の人差し指をはね上げる表現である。この表現は、古い東京手話および古い大阪手話、現在においても一部の高齢話者、および古い台北手話および古い韓国手話にみられる表現である。この表現は、もともと金額の意味でのみ使われていたが、次第に「100 回」「100 個」という広い意味でも使われるようになった。この表現の語源については、複数の地域の複数の話者から、「以前 100 円札が使われていた時代に、財布から 100 円札を抜き取るしぐさだ」と言われている。このことから、もともとは金額の意味で使われていた両手の「100」の意味が拡張して、現在ではお金に限らず、幅広く使われるようになったと考えられる。

2.「男」「女」とその複数形について

日本手話では、「男」は利き手の親指を立て、「女」は利き手の小指を立てて表す（図 1a. b.）。両手の親指または小指を立てて中心に置き、そこから円を描くように動かすと複数形になる。一方、現韓国手話の「男」は、両手の親指を立てて中央で２回接触させ、「女」は、両手の小指を立てて中央で２回接触させる（図１c.d.）。韓国手話の「男」「女」には、複数形と単数形の扱いがない。日本手話においても、兵庫、大阪の 90 歳以上の話者に、韓国手話と同じ表現がみられ、それぞれ複数の意味で使用している例が観察された。これは佐土原（1902）が鹿児島の手話において報告している「男たち」「女たち」とも共通する。これらの調査結果から、もともと日本手話の片手の単数形と両手で表す複数形の表現が韓国に入った後、韓国手話が独自に発達した結果、複数形の表現の意味が、単複に関わらず男性あるいは女性一般を示す意味に変化したと考えられる。

	「男」	「女」	「男」	「女」
	a.	b.	c.	d.
語形				
	日本手話		韓国手話	

図１日本手話および韓国手話の「男」「女」　（加藤他 2020: 23－24）

３．「上手」「下手」「かまわない」「ルール」

日本手話ファミリーの語には、語形が同じでも意味や用法に違いがある語が多く観察されるが、ここでは、中でも日常生活の中でもよく使用される「上手」「下手」「かまわない」「ルール」（いずれも日本手話の意味）を取り上げて、各言語での意味と用法の違いをまとめる。対象となる４つの語を図２に示す。

a.	b.	c.	d.
「上手」	「下手」	「かまわない」	「ルール」

図２　日本手話ファミリーの語に共通してみられる語形

まず、図２a.b.は、日本手話、台湾手話、韓国手話いずれでも、「上手」「下手」の意味で使われている。例えば、「料理が上手」「お裁縫が下手」などである。これらの語源は、着物の振袖から由来しているといわれ、袖にしわがなくきれいに着ることができる様子を「上手」、しわが立って荒い様子を「下手」という意味だとして言い伝えられている。「上手」の表現は、韓国手話では、朝・昼・夜の挨拶「こんにちは（良く生きる）」や、食事前の「いただきます（良く食べる）」でも使われており、「良い(well)」という意味でも使われている。この用法は、韓国語の意味からの影響を受けて語が形成されており、日本手話および台湾手話にはみられない。一方、台湾手話においては、「上手」以外に、「できる(can)」「起こる（will）」の意味があり、その背景には、中国語が影響していると考えられる。中国語および中国手話では、「できる」「起こる」が同じ語形が使われており、手話談話を分析すると、中国語に対応する形での表現となっている。このように、各手話言語とその背景にある音声言語との接触により、意味の違いおよび用法に影響していることが見いだされた。「下手」を意味する表現では、韓国手話では「間違い」、台湾手話では「できない」「起こらない」の意味でも使われており、日本手話で使われる意味と比較すると、より広い意味で使われていることがわかる。

表１　日本手話「上手」における各言語の意味

	スムーズ	良い	上手	できる	起こる
1930 年代の日本手話	✔	✔	✔		
現日本手話	✔		✔		
現台湾手話	✔		✔	✔	✔
現韓国手話	✔	✔	✔		

表２　日本手話「下手」における各言語の意味

	でこぼこ	間違い	下手	できない	起こらない
1930 年代の日本手話	✔		✔		
現日本手話	✔		✔		

現台湾手話			✔	✔	✔
現韓国手話		✔	✔		

続いて、小指を顎に当てる「かまわない」（図 2c.）については、3 言語とも「許可」を意味することで共通している。日本手話では、「許可」だけでなく、「どういたしまして」、顔を横にふる動作を伴って「不要」の意味でも使われる。台湾手話では、「可能(can)」、台湾手話では、「身体的に問題がない」「大丈夫（OK)」の意味で使われるなど、日本手話とは異なる用法での表出も観察された。表３に各言語における「かまわない」の例文をまとめる。

表３　日本手話の「かまわない」における各言語の意味

（1）A:　座ってもいい？ B:　かまいません　どうぞ	日本手話・台湾手話・韓国手話
（2）A：手伝い　ありがとう B：どういたしまして	日本手話
（3）A:　説明　足りない？ B：もう　いい　大丈夫	日本手話
（4）A:　明日の夜、食事あなた来る、できる？ B:　できる（いける）	台湾手話
（5）A:　彼女　手伝い　必要　？ B:　私　彼女　手伝い　できる	台湾手話
（6）A：　今朝は、体調が良くない B:　大丈夫？	韓国手話

このように、それぞれの言語において、意味の広がりがみられており、音声言語からの影響をうけてのものかどうかについては、更なる分析が必要となる。

最後に、日本手話「ルール」（図２d.）の手型をもつ語について述べる。図２d.は、日本手話の指文字の「ル」を両手で表した表現で、文字通り「ルール」の意味である。台湾手話には指文字は存在せず、韓国手話は日本手話の指文字とは異なる手型で形成されている。したがって、両言語とも「ル」とは関連せず、台湾手話では、「うそではない」「100%そのまま」という意味で用いられ、韓国手話では、「約束する」「神に誓って」の意味で使用されている。台湾については、インタビュー調査から、日本からろう者の宣教師が台北に派遣され、教会における伝道から伝えられた語であることがわかった。「ル―ル」の「ル」の手型が、神に誓うしぐさと似ていることから、意味が誤解されたまま台湾手話の語として語彙化した。韓国手話においても、「ル」の手型が、「誓い」を表す手型と見立てられ、片手の表現は「約束」として、両手で表すともっと深い約束、すなわち「神に誓って」という意味になるという（林 2023)。

表４　日本手話の「ルール」における各言語の意味

（7）信号　赤　止まる　交通ルール　守る　必要 （赤信号は止まるのが交通ルール、守る必要がある）	日本手話
（8）A: 仕事　中　ゲーム　ダメ　ルール （仕事中、ゲームはしてはいけない、ルールだ） B: ルール？　すみません	日本手話
（9）わたし　ろう　ルール （わたしは、ろう者。うそではない）	台湾手話
(10) 台南聾学校　卒業生　ルール （わたしは、台南ろう学校の卒業生。間違いない。）	台湾手話
(11) 私　これ　プレゼント　ルール （プレゼントすることを約束する）	韓国手話
(12) 盗み　しない　ルール （神に誓って盗みはしない）	韓国手話

以上、数詞、「男」「女」とその複数形、「上手」「下手」「かまわない」「ルール」に焦点を当てて、3 言語における意味と用法の違いを調査し、変化の方向性が明らかな語については意味の変化を示した。語のひとつひとつには異なる発達経緯があり、今後、より丁寧に記述し、音声言語からの影響についても詳しく分析していく必要性が求められる。

研究成果については、現在、台湾手話話者、韓国手話話者と共著で論文を執筆中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　6件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Jean Ann, Angela M. Nonaka and Keiko Sagara	４．巻 －
２．論文標題 Considering the wris: Observations about the dactylogy systems of BSL, ASL and JSL	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Looking at Language from All Sides	６．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木全純大、三輪誠、佐々木裕、原大介	４．巻 －
２．論文標題 外国手話データセットを活用した日本手話動画からの音節構成要素認識	５．発行年 2024年
３．雑誌名 言語処理学会第30年次大会発表論文集	６．最初と最後の頁 972-977
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原大介、三輪誠	４．巻 －
２．論文標題 日本手話のタイプ３音節非利き手に現れる手型音素	５．発行年 2023年
３．雑誌名 第49回大会予稿集	６．最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 相良啓子	４．巻 －
２．論文標題 適応することば [日本手話]	５．発行年 2023年
３．雑誌名 菊澤律子・吉岡乾（編）『しゃべるヒト：ことばの不思議を科学する』	６．最初と最後の頁 248-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菊澤律子	4．巻 ー
2．論文標題 日本手話と日本語対応手話の特徴と違い	5．発行年 2023年
3．雑誌名 佐野愛子・佐々木倫子・田中瑞穂（編）『日本手話で学びたい！』	6．最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Keiko Sagara	4．巻 -
2．論文標題 Historical Relationships between Numeral Signs in Japanese Sign Language, South Korean Sign Language and Taiwan Sign Language	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Asian Sign Linguistics	6．最初と最後の頁 7-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 相良啓子	4．巻 -
2．論文標題 第2章　類型論	5．発行年 2023年
3．雑誌名 手話言語学トピック:基礎から最前線へ	6．最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 相良啓子	4．巻 --
2．論文標題 適応することば【手話言語】	5．発行年 2023年
3．雑誌名 しゃべるヒトーことばの不思議を科学する	6．最初と最後の頁 248-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢野羽衣子・菊澤律子	4．巻 --
2．論文標題 消滅することば【手話言語】	5．発行年 2023年
3．雑誌名 しゃべるヒト―ことばの不思議を科学する	6．最初と最後の頁 309-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原大介	4．巻 -
2．論文標題 第1章　交通事故手話裁判と手話言語	5．発行年 2022年
3．雑誌名 手話が「発音」できなくなる時　―言語機能障害から見る話者と社会	6．最初と最後の頁 11-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kikusawa,R.	4．巻 108
2．論文標題 Linguistic Mapping and Historical Analyses: Vertical and Horizontal Transmission and Potential GIS Applications	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Senri Ethnological Studies	6．最初と最後の頁 75-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Kikusawa, R. and J. H. Lowry	4．巻 108
2．論文標題 Developing a Fijian Language Geographic Information System	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Senri Ethnological Studies	6．最初と最後の頁 101-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Keiko Sagara and Nick Palfreyman	4．巻 6 (1)
2．論文標題 Variation in the numeral system of Japanese Sign Language and Taiwan Sign Language: A comparative sociolinguistics study	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Macro and micro-social variation in Asia-Pacific sign languages	6．最初と最後の頁 119-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Angela Nonaka, Jean Ann and Keiko Sagara	4．巻 54 (1-2)
2．論文標題 Linguistic and cultural design features of sign language in Japan	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Visible Language	6．最初と最後の頁 30-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 相良啓子	4．巻 44 (3)
2．論文標題 日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化―「10」「100」「1000」に着目して―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6．最初と最後の頁 557-583
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ritsuko Kikusawa	4．巻 11
2．論文標題 Conducting Syntactic Reconstruction of Languages with No Written Records	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Reconstructing Syntax, Brill's Studies in Historical Linguistics	6．最初と最後の頁 108-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Keiko Sagara and Ritsuko Kikusawa	4．巻 101
2．論文標題 Paradigm Leveling in Japanese Sign Language and Related Languages	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Senri Ethnological Studies	6．最初と最後の頁 147-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009424	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 相良啓子	4．巻 44-3
2．論文標題 日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化ー「10」「100」「1000」に着目してー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6．最初と最後の頁 557-583
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009482	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ー

1．著者名 高藤朋史，三輪誠，佐々木裕，原大介	4．巻 0
2．論文標題 コーディングと動画を併用した日本手話音節の適格性予測	5．発行年 2020年
3．雑誌名 言語処理学会第26回年次大会発表論文集	6．最初と最後の頁 259-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ー

1．著者名 Kikusawa, Ritsuko and Sano Fumiya	4．巻 1
2．論文標題 Minpaku Sign Language Studies 1	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Senri Ethnological Studies 101	6．最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ー

１．著者名 Ritsuko Kikusawa	４．巻 0
２．論文標題 Utilizing visual materials for introducing the languages of the world and the world of language	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Conservation of Cultural Heritage in a Changing world	６．最初と最後の頁 195-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計25件（うち招待講演　5件／うち国際学会　13件）

１．発表者名 Keiko Sagara
２．発表標題 Toward the Development of Sign Language Studies in Asia
３．学会等名 XIX World Congress of the World Federation of the Deaf（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Keiko Sagara
２．発表標題 Diachronic change and Variation within and between sign languages in Japan, Taiwan and South Korea: The impact of language contact
３．学会等名 Sign Language Linguistics Workshop（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 相良　啓子
２．発表標題 日本手話と台湾手話における語彙の歴史的変遷および台湾手話の現状
３．学会等名 開発途上国における社会発展と国家と手話の関係をめぐる課題研究会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 原　大介、三輪　誠
２．発表標題 日本手話のタイプ３音節非利き手に現れる手型音素
３．学会等名 日本手話学会第49回
４．発表年 2023年

１．発表者名 原　大介、三輪　誠
２．発表標題 手話コーパスを利用した日本手話の手型音素の認定 -0手型の場合-
３．学会等名 福祉情報工学研究会（WIT）
４．発表年 2023年

１．発表者名 菊澤　律子
２．発表標題 手話ってどんな言語？～手話を言語学的に観察する～
３．学会等名 明石・伊丹「ろう史と手話」研究会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Keiko Sagara
２．発表標題 Diachronic change in Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language and South Korean Sign Language: Focus on kinship terms
３．学会等名 the 14th Theoretical Issues in Sign Language Research conference (TISLR14)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Keiko Sagara and Nick Palfrayman
２．発表標題 Variation within and between sign languages in Japan, Taiwan and South Korea: The impact of language contact
３．学会等名 15th Biennial Desert Linguistics Society (HDLS15)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Keiko Sagara and Nick Palfrayman
２．発表標題 Insights from sign language typology: Methodologies in cross-linguistic research on semantic fields
３．学会等名 14th Conference of the Association for Linguistic Typology (ALT2022)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ritsuko Kikusawa, John Lowry and Paul Geraghty
２．発表標題 Fijian Language GIS Project: Exploring Geographic Variation of Communalects on Kadavu Island
３．学会等名 Geospatial Research Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 原大介 ・三輪誠
２．発表標題 日本手話の音声的手型と音素的手型
３．学会等名 日本手話学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 相良啓子
２．発表標題 日本手話、台湾手話、韓国手話における言語変化 －数詞および親族表現に着目して－
３．学会等名 手話研究セミナー：日本手話研究所
４．発表年 2022年

１．発表者名 菊澤律子
２．発表標題 『オーストロネシアン』とは？言語の系統と人類の移動誌
３．学会等名 東大総合研究博物館研勉強会講演
４．発表年 2022年

１．発表者名 原大介
２．発表標題 日本手話における手型変化
３．学会等名 第47回日本手話学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 西牧樹生，堀内靖雄，原大介，黒岩眞吾
２．発表標題 モーションキャプチャによる日本手話の手の位置の音素に関する分析
３．学会等名 福祉情報工学研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Keiko Sagara
２．発表標題 Sign Language in Japan, South Korea and Taiwan: An introduction
３．学会等名 28th Japanese/Korean Linguistics Virtual Conference (JK28)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hara, Daisuke, Makoto Miwa, Ichiro Yuhara,
２．発表標題 Extrametricality of the initial location in the type-III syllable of Japanese Sign Language
３．学会等名 28th Japanese/Korean Linguistics Virtual Conference (JK28)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 西牧樹生，堀内靖雄，原大介，黒岩眞吾
２．発表標題 日本手話における手の位置の音素に関するモーションキャプチャによる分析
３．学会等名 人工知能学会，第91回言語・音声理解と対話処理研究会
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 原大介
２．発表標題 日本手話の手型音素とその異音
３．学会等名 第3種研究会第16回研究会，電子情報通信学会
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 Keiko Sagara
２．発表標題 Numeral Variants and Their Diachronic Changes in Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language and Korean Sign Language
３．学会等名 Theoretical Issues in Sign Language Research 13（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Sagara and Nick Palfreyman
２．発表標題 Variation in Japanese and Taiwan Sign Language
３．学会等名 The impact of language contact（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Theresia Hofer and Keiko Sagara
２．発表標題 Chinese Language Influences on Tibetan Sign Language users in Lhasa: Cardinal Numbers and Days of the Wee
３．学会等名 Theoretical Issues in Sign Language Research 13（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Jane Tsay, Keiko Sagara and Ritsuko Kikusawa
２．発表標題 Arbitrary Signs Are More Stable Than Iconic Signs: Evidence from Taiwan Sign Language and Japanese Sign Language
３．学会等名 The 8th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, National Museum of Ethnology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hara Daisuke and Makoto Miwa
２．発表標題 The phonotactics of type-III syllables of Japanese Sign Language
３．学会等名 Theoretical Issues in Sign Language Research 13（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hara Daisuke and Makoto Miwa
２．発表標題 The Well-formedness and the Ill-formedness of JSL Type-III Syllables
３．学会等名 he Chicago Linguistic Society 55th Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 広瀬浩二郎・相良啓子	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波ジュニア新書	５．総ページ数 206
３．書名 「よく見る人」と「よく聴く人」－共生のためのコミュニケーション手法	

１．著者名 相良啓子	４．発行年 2024年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 368
３．書名 日本手話の歴史的研究－系統関係にある台湾手話、韓国手話の数詞、親族表現との比較から－	

１．著者名 菊澤律子・吉岡乾	４．発行年 2023年
２．出版社 文理閣	５．総ページ数 326
３．書名 しゃべるヒト―ことばの不思議を科学する	

１．著者名 石原和・菊澤律子	４．発行年 2022年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 144
３．書名 手話が「発音」できなくなる時―言語機能障害からみる話者と社会	

１．著者名 Sano, F. and R. Kikusawa	４．発行年 2022年
２．出版社 National Museum of Ethnology	５．総ページ数 182
３．書名 Minpaku Sign Language Studies 2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の記述とその歴史的変遷―数詞および親族表現に着目して―
https://ir.soken.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=6470&item_no=1&page_id=29&block_id=155

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	原　大介 (Hara Daisuke) (00329822)	豊田工業大学・工学部・教授 (33924)	
研究分担者	菊澤　律子 (Kikusawa Ritsuko) (90272616)	国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・教授 (64401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関